

目 次

- ・平成18年度 大学卒業式
 大学院学位認証式 ……………3
- ・平成18年度 卒業式学長告辞
 学 長 今井久夫
 代読/副学長 中村正明 ……………3
- ・平成18年度 卒業式理事長式辞
 理事長 今井久夫
 代読/理 事 川添堯彬 ……………5
- ・平成19年度 本学入試全日程終了 ……………8
- ・第100回歯科医師国家試験結果 ……………8
- ・新給与表導入説明会開催 ……………8
- ・第14回公開講座（枚方講座）開催 ……………9

- ・平成18年度 解剖体遺骨返還式 ……………9
- ・学位（博士）授与報告 ……………10
- ・川本先生はじめ3名が定年退職 ……………11
- ・定年退職に際して 川本達雄 ……………11
- ・定年退職に寄せて 矢尾和彦 ……………12
- ・平成18年度 臨床研修費等補助金交付 …12
- ・寄 贈 ……………12
- ・古跡養之真前学長、名誉学長に ……………13
- <トピックス>
- ・平成18年度 第2回人権講演会 ……………13
- ・人 事 ……………14
- ・あとがき ……………14



平成18年度 大学卒業式・大学院学位認証式（平成19年3月20日）

平成18年度 大学卒業式・大学院
学位認証式

平成19年3月20日(火)午前10時より、平成18年度
大学卒業式・大学院学位認証式が楠葉学舎講堂におい
て行われた。

今井久夫理事長・学長が静養中のため、卒業式学長
告辞を中村正明副学長、理事長式辞を川添堯彬理事が
それぞれ代読した。大学学部卒業生118名、大学院専
攻科卒業生21名、一人ひとりに対して卒業証書ならび
に学位認証書が手渡された。

平成18年度 卒業式学長告辞
学長 今井 久夫
代読/副学長 中村 正明

浅春の気配が強く感じられ
るこの良き日に、無事大学を卒
業されました118名の皆さん、
また大学院を無事修了されまし
た21名の皆さん、本日は誠に
おめでとうございます。本来なら
ば、皆さん方と直接、御目文字
の上で学長としてのお祝いを申
し上げるべきところではござい
ますが、病には勝てず、静養中
の身ゆえ本席への出席が叶わず、
祝意の文書をしたため中村副学
長に託させて頂きました失礼の
段、お許し下さい。



さて、この良き日を迎えられた皆さん方の心中は、
雲ひとつない日本晴れであろうと思います。また、こ
の6年間あるいは4年間での、悲喜交々な出来事や悔
しかった思いなど、走馬灯のように脳裏に去来してい
ることと拝察いたします。同時に、在学中での講義や
基礎・臨床実習等勉学面での苦しみや挫折感、さら
には卒業試験や国家試験に対する不安、大学院生にあ
っては学位論文に対する論文審査合否への不安感、時
には友人同士あるいはクラブ活動等における複雑な人間

関係での心の葛藤など、そうした様々な壁を意欲と熱
意、努力と忍耐でもって、無事乗り越えてこられた貴
方がた一人ひとりを褒めてあげたく、誇りに思ってい
ます。貴方がた自身も、その貴重な体験を今後の人生
に生かして頂ければと願っております。

さて、本日卒業証書を手にした皆さん方は、先ほ
ど申しましたように、無事6年間の学業を終えられま
して、2月10日(土)、11日(日)の両日に行われました
国家試験を受けられたのですが、学長としましては、
欲張りかもしれませんが、90%以上の合格を信じて止
みません。その意味からも、3月28日の発表が待ち遠
しくも感じられます。

一方、本日ご臨席頂きました学部学生のご父兄にお
かれましては、この日を無事迎えられることに対しま
して、ある意味では卒業生以上の複雑な思いが脳裏を
過り、喜びと同時に、ある種の達成感とが交錯した感
無量のお気持ちであろうとお察いたします。その意
味からも、本日ご臨席頂いておりますご父兄方に対し
ましては、『おめでとうございます』に加え、『お疲
れ様、ご苦労様でした』という労いの言葉も併せて、お
贈りさせて頂きます。

反面、今年度ほど多くの6回生が卒業できなかった
のも、創立95周年という本学の歴史を振り返ってみ
てもなかったのではないのでしょうか。136名のうち18名
の6回生が卒業資格を得られなかったということであ
ります。これには、いくつかの理由が考えられますが、
その最たる理由は本学年学生の『やろうとする気持ち』
の欠如にあったようです。ご存知のように、今年度の
6回生は新カリキュラムと旧カリキュラムの狭間にあ
ったがために、学生たちの多くに『今年は卒業資格の
ハードルが低く、甘い』との身勝手な自己判断が頭
の中にあることを、学業への態度を始め、様々なこと
から感じていました。そこで、比較的早い時期から教務
部サイドにおきましても、例年以上に成績評価につ
いては気を配り、学生本人はもとより、ご父兄に対しま
しても再三の呼び出しを行い、注意喚起を促してきま
しましたが、結果的にはその努力も実を結びませんでした。
すなわち、成績不振の学生たちの多くに、我々大学サ
イドの気持ちが伝わっておらず、『赤信号、みんな
で渡れば怖くない』ではないでしょうが、『心配しなく
ても、大学はこんなに多くの留年生は出さない』ある
いは『従来のようにどうにかなる。どうにかしてもら

える』などといった安易感と侮りが心の中に芽生えていたことは事実であります。

加えて、今年度の留年が例年になく多くなった理由のひとつに、去年厚生労働大臣による『国家試験の平均点数の引き上げを考えている』ことを示す確認書、さらには数年前からの本学における卒業試験すなわち学士試験2の取得点数と国家試験合格との間に平行な関係があるとの統計的根拠などをトータルに勘案して、3年ほど前から成績評価を厳格に実施しており、今回のことも苦渋の選択であったことをご理解頂かなくてはなりません。

但し、今回卒業が叶わなかった学生さんたちには、ご父兄のご負担も考慮して授業料を半額とし、別枠のカリキュラムのもと、来年度の国家試験に無事合格が果たせますように我々教員は、厳しいなかにも温かい心でもって教育に携わっていく所存であります。

さて、大学院修了者21名の皆さん、本日は誠にありがとうございます。また、ご臨席のご父兄におかれましては、専攻科指導教授から直接学位記を授与されている我が子の頼もしい晴れ姿を目の当たりにされ、感慨もひとしおのこととお察し申し上げます、心よりお祝い申し上げます。

このたび無事、大学院を修了されました大学院生の皆さん方にとっては、『研究に専念する』という義務を負っての研究中心の厳しい4年間であったことと思います。同時に、学部学生の時代と違って、貴方たちが念願とされていた博士(歯学)の称号を得るには、指導教授による厳しい指導はもとより、直接のインストラクター教員や先輩たちからの貴重な意見ならびにアドバイス、さらには後輩たちからの心温まるサポートがあったことと思います。そうした上に、何よりも貴方たち自身の研究意欲と努力とが相俟って学位記の取得に繋がったことから、皆さん方の感慨もひとしおであろうとお察し致します。

さて、学部学生さんたちが、本日晴れて卒業式を迎えられたのは、前述のように、貴方たちのこの6年間にわたる努力と研鑽によることは言うまでもありません。しかし、忘れてはならないのが、この6年間にわたるご両親やご家族の理解と協力、多方面からのサポートを頂いた教職員、あるいは親や先生にも相談できない悩みを聞き、貴重な意見をもらった先輩や友人など、貴方がたの周囲を取り巻く諸々の人々に対する

感謝、温情、人情を忘れないで頂きたいと言うことです。また、大学院を修了されました方々におかれましても同様で、6年間の学部学生卒業後も、なおこの4年間の研究を中心とした大学院生活を温かい目で見守り、サポートをして頂いたご父兄に対する感謝の念であります。周知のように、貴方がたのように大学院に進み、より多くの専門知識と技量の修得に努めようと希望していたにもかかわらず、家庭的事情などにより断念せざるを得なかった方々も多数おられたという事実です。

以上のことから、ご子弟が大学卒業、大学院修了という良き日を迎えることができましたのも、本日までの6年間、4年間を心置きなく学業や研究に没頭できる環境を提供され、常に温かい眼差しで見守って来られましたご父兄のお力添え無くしては叶わないことでもあります。この点に関しましても、本日ご臨席頂いておりますご父兄に対しまして、敬意を表させていただきます。

さて、今回ご卒業されました学部学生の全ての方々には、去年から法律により義務化されました1年間の卒後臨床研修に携わらなくてはなりません。一方、大学院を無事修了された皆さん方には、直ちに専攻講座に入局され、より専門分野での見識を高め、研究も継続されながら、後輩大学院生の指導や学生教育にも携わっていかれる方もあれば、他大学や大学病院あるいは地域社会の臨床に携わられる方々もあるかと思えます。いずれにしても、大学という巣箱から歯科医療界を包含した広義な歯科界に向かって巣立って行かれるわけですが、現在の歯科界は貴方たちが考えられておられるほど甘くはありません。むしろ厳しい現実が待ち受けているといっても過言ではありません。

そこで、今回卒業あるいは大学院を修了された皆さん方に『無知を恐れることなかれ、偽りの知識を恐れよ』の言葉をお贈りしたいと思います。人間とは、自身の弱みを見せたくないために、ともすれば『知らないにもかかわらず、知ったふりをする』あるいは『知ったかぶり(頭)をする』面があります。これは、医療の場にあつては戒めなくてはなりません。

換言しますと、人間聖人君子でない以上は、分からない無知な面は多々あります。しかし、自身が無知であることを自覚している者には、しかるべき知識を得ようとする意欲のあることも意味しております。反面、

偽りの知識であるにもかかわらず、正しい知識であると思いついている者は、自分自身で考え、探求する意欲が乏しいことを意味しております。皆さん方のように、新しく医療の場に携わって行かれる方々にとっては、現在の無知を恥じることはありません。むしろ、将来に向かっての正しい知識の修得に努められる姿勢が必要であります。少なくとも間違った知識を正しいと思いつく安易な考えだけは慎んで頂きたく願っております。すなわち、偽りの知識は医療の場におけるミスに繋がることが多いということを強調させて頂き、学長としての告辞とさせて頂きます。

平成18年度 卒業式理事長式辞

理事長 今井 久夫
代読/理事 川添 堯彬

第55回大阪歯科大学卒業式を迎えられます118名の学部学生ならびに21名の第43回大学院博士課程修了者の皆さん、本日は誠にありがとうございます。同時に、本席にご臨席頂きましたご父兄におかれましても、ご子弟の晴れ姿を目の当たりにされ大学6年間、大学院4年間の苦労も忘却の彼方へと去り、ご子弟に対する新たなる夢と希望に胸を膨らませておられることとお察しいたします。本来ならば、本席に出席し皆さん方と拝眉の上、お祝いを申し上げるのが本意ではありますが、年頭から静養中の身ゆえ、出席が叶わなくなり、祝意をしたためた文書を川添理事に託させて頂きました失礼の段、お許し下さい。

さて、学部ご卒業の皆さん、2月10、11日の両日に行われました歯科医師国家試験の出来栄はいかがだったでしょうか。本日の皆さん方のお顔を拝見しますと、自信に満ちた晴れ晴れとした表情が伺え、理事長といたしましては、安堵感を覚えると同時に、3月28日の合格発表が待ち遠しくも感じられます。



周知のように、今年卒業される皆さん方には、卒後臨床研修が必修化され2年目を迎えられるわけですから。厄介なことに、この研修を修了されなくては、将来の病院開設者、病院長、医院開業等に携わることが出来ないシステムであり、単独型と複合型に大別されます。皆さん方はマッチング等が旨く行えましたでしょうか。好むと好まざるにかかわらず、貴方たちは単独型か、協力型の開業医や歯科病院等とのマッチングにより、1年間の研修が義務付けられているわけですから。この研修の意図は、厚生労働省によりますと、「全人教育によりこれからの歯科医師の資質の向上を図り、『クールヘッド、ウォームハート』をもった歯科医師を世に送り出すため」として卒業年度の歯科医師を対象に義務付けされたものであります。その意味でも、今春卒業されます皆さん方にも、その趣旨を理解して頑張って頂きたく願っております。

一方、大学院博士課程を修了されました皆さん方は、それぞれが専攻講座指導教授の下での研鑽に努め、専門分野での知識をより深められたことと思います。しかし、単に学位を取得したことに満足せず、得られた知識と専門分野での研究成果をこれからの歯科医療分野に反映させて頂くよう切望して止みません。そのことが、この4年間、お世話になった大学、情熱溢れる研究指導を頂いた指導教授ならびに貴重なる提言を頂いたインストラクターをはじめ、協力を惜しまなかった講座員へのご恩返しにも繋がるのです。とりわけ、今年4月からは、全国の大学において新しい教員組織が施行されます。本学においても例外ではなく、この4月からは教授、助教授、講師、助手に代わって、教授、准教授、講師、助教でスタートするわけですから。とりわけ新しい職制である助教は、従来の助手とは大きく異なり、将来の教授、准教授へのキャリアパスとして位置づけられ、研究はもとより学生教育、大学院生指導等に携わることができ、将来は大学における教学の中核となるべき人たちであると言われております。今年度の大学院修了者から、講座に残られる場合には、この助教からスタートする重要な職責を担うこととなります。

以上のように、大学を含め歯科界全体が大きな移り変わりを見せていますように、歯科医療の場にあっても大きな変革が起っています。すなわち、再生医療の発展に伴う修復から再生への変化、個々の遺伝子解析

による疾患発症機序の解明，組織への侵襲を最小限に止めるミニマム・インターベンションの概念，さらには全身疾患を踏まえた歯科医療，治療医学から予防医学への移り変わりなど著しい変革を遂げております。

これらの流れを勘案した場合，日常臨床の場であっても，一昔前までのDOS(Doctor/Disease Oriented System)のような当面の問題を専門的知識や記憶力によって解決を図ろうとする診療システム，すなわち医師の体験に基づく疾患，診断などを中心とする主観的知識伝授型医療からPOS(Patient/Problem Oriented System)という思考型の診療システム，すなわち患者自身の抱えている問題の解決を図ることを中心とした問題解決型医療へと大きく様変わりをしてきました。このようなPOSによる診療システムを取り入れ，患者さんのニーズに応えるには，常日頃からプロフェッショナルな歯科医師として自覚と専門知識の研鑽，さらには医療スキルの修得に努め，国民に歯科的QOLすなわち歯科における質的満足した生活を与えられる歯科医療を施されなくてはなりません。同時に，将来の歯科界を背負って立つ皆さん方には，本学や我が国のみに止まらず，広く国際舞台にまで羽ばたいて頂くことを切望して止みません。

最後に，大学学部卒業生ならびに大学院修了者に理事長として『もし成功しなかったら試みよ，さらに試みよ』という言葉をお贈りしたいと思います。皆さん方の殆どが，今日からは厳しい歯科界に羽ばたいて行かれるわけですが，その際，人生や医療経験が浅く乏しい若い皆さん方には，予想さえしない困難な出来事や過ち，未知なる体験等に遭遇され，戸惑いや行き詰まりなどを覚えられることと思います。その時，貴方たちには，貴方たちなりの考えや現在までに培ってきた知識や経験でもって，それらの過ちに気づき，切り抜けるべき試みがなされることと思います。その際，旨く解決が図られる場合もあるでしょうが，多くの場合，自分が考えていたような結果が得られず落ち込んだり，自信喪失に繋がったり，自暴自棄の心境に陥ることもあるかと思ひます。しかし，挫けることなくさらに打開策を講じながら解決を試みて下さい。それでも，旨く行かない場合もあるかと思ひますが，その場合にあっても必ず成功するといった強い信念と諦めないという強い意志でもって，前向きに進んで頂きたいと思っています。

換言しますと，貴方がたのような若いドクターたちが，これから携わっていかれる医療の場にあつては，様々な障害や問題が待ち受けていると言っても過言ではありません。そのような場合，今までであれば恩師や先輩たちに相談できましたけれども，これからは，恩師や先輩たちの相談も時には必要であるかも知れませんが，まずは自分自身で考え，判断し，正しいと信じる方法を試みながら，成功という結果を得るといった姿勢，意欲が求められます。そして，そうした模索を重ねながら得た実体験や経験が貴方たちを成長させていくのです。

したがって，若い皆さん方にとっては，これからの一度や二度あるいはそれ以上の過ちや障害に遭遇されたとしても，それらに挫けることなく，成功に導くための強いチャレンジ精神を育み，新しいことに挑戦していく強い精神力と忍耐力を養って頂きたく，このことをお願いしまして理事長の式辞とさせていただきます。





平成19年度 本学入試全日程終了

本学の設置する大学，大学院，専修学校の平成19年度の入学試験状況は，下記のとおりである。

平成19年度の入学者は，大学においては128名（推薦28名，一般100名）であり，大学院は18名，歯科技工士専門学校は23名（同専攻科9名），歯科衛生士専門学校は36名であった。大学以外は，入学定員を割る結果となった。

第100回 歯科医師国家試験結果

先般実施された，第100回歯科医師国家試験の合格発表があり，その結果は次のとおりであった。

- ・試験日：平成19年2月10日（土）・11日（日）
- ・試験場：関西大学天六学舎（大阪市）
- ・合格発表：平成19年3月28日（水）

第100回歯科医師国家試験結果

	受験者数	合格者数	不合格者数	合格率
新卒	118	82	36	69.5%
既卒	46	18	28	39.1%
合計	164	100	64	61.0%
全国	3,200	2,375	825	74.2%

今年の受験者数は3,200人で昨年より100名余り少なく，合格者も300人近く減少し，合格率は74.2%で昨年より6.6ポイントも下がった。残念ながら，本学は昨年より10ポイント以上も合格率を下げた。新しい採点方式の採用で国家試験の合格率が年度により安定性を欠いているのは問題であるが，それへの対応策が急務となっている。

私立歯科大学では，東京歯科大学，愛知学院大学歯学部，日本大学歯学部および昭和大学歯学部が今年も90%前後の合格率を示しており，ここ数年，高い水準で安定している。愛知学院大学歯学部，日本大学歯学部などは昨年より合格率が上がっている。また，明海大学歯学部，日本歯科大学も全国平均を上回る合格率であった。

第100回歯科医師国家試験大学別合格率

学校名	受験者数	合格者数	合格率
国公立大学(計)	811	710	87.5%
北海道大学歯学部	60	57	95.0%
東北大学歯学部	66	53	80.3%
東京医科歯科大学歯学部	74	67	90.5%
新潟大学歯学部	56	51	91.1%
大阪大学歯学部	62	55	88.7%
岡山大学歯学部	52	47	90.4%
広島大学歯学部	65	56	86.2%
徳島大学歯学部	72	61	84.7%
九州大学歯学部	60	52	86.7%
長崎大学歯学部	66	53	80.3%
鹿児島大学歯学部	76	67	88.2%
九州歯科大学	102	91	89.2%
私立大学(計)	2,383	1,664	69.8%
北海道医療大学歯学部	119	86	72.3%
岩手医科大学歯学部	108	58	53.7%
奥羽大学歯学部	151	88	58.3%
明海大学歯学部	144	119	82.6%
日本大学松戸歯学部	149	108	72.5%
東京歯科大学	133	120	90.2%
日本歯科大学	151	118	78.1%
日本大学歯学部	150	131	87.3%
昭和大学歯学部	114	100	87.7%
鶴見大学歯学部	131	80	61.1%
神奈川歯科大学	146	104	71.2%
日本歯科大学新潟生命歯学部	131	75	57.3%
松本歯科大学	168	70	41.7%
愛知学院大学歯学部	147	130	88.4%
朝日大学歯学部	137	78	56.9%
大阪歯科大学	164	100	61.0%
福岡歯科大学	140	99	70.7%
その他(計)	6	1	16.7%
総 合計	3,200	2,375	74.2%

新給与表導入説明会開催

平成19年2月20日天満橋学舎，21日楠葉学舎において，平成19年4月から導入される新給与表についての説明会が開催された。

最初に，村上常務理事から大学財政安定化への方針が述べられ，続いて川添人事担当理事から財務状況と人件費について説明があり，最後に高須人事課長から新給与表の具体的な説明および質疑応答が行われた。

第14回公開講座（枚方講座）開催

第14回公開講座(枚方講座)が平成19年2月17日から3月10日までの毎週土曜日に、本学楠葉学舎講堂にて開講された。今回の枚方講座は、厳しい寒さの上、雨天・強風と生憎の天候であったにもかかわらず、延べ670名(初日は170名、第2週目は155名、第3週目は179名、最終日には166名)の聴講者が出席された。

各講師は、「歯が無くなり、噛み合わせが変わると健康にどのような影響があるのか」、「味覚はどのような時に変化するのか」、「口腔ケアの重要性、歯ブラシの仕方」、「歯周病と生活習慣病とのかかわり」などをメインテーマに沿った内容で講演した。

聴講者は毎回、真剣に耳を傾けられ、講演後の質問時間を待っていたように挙手され、積極的に疑問を尋ねられていた。帰り際には「とても充実した時間でした」、「来年も出席します」などの言葉をかけていただいたのが印象的でした。



森田公開講座委員長の挨拶と更谷講師の質疑応答

4週連続して全講座に出席された101名を代表して、71歳と72歳のご夫妻に修了証書と記念品(第13回公開講座の講演集)が川添堯彬副学長から手渡され、平成18年度第14回公開講座は夏の天満橋講座とともに、今回も盛況のうちに無事に終了した。

平成18年度 解剖体遺骨返還式

平成18年度解剖体遺骨返還式が、去る平成19年3月2日(金)午後1時から、楠葉学舎5号館3階大会議室にて執り行われた。

始めに、歯科医学教育の為に自らの身体を提供された故人の御霊に対し、参列者一同ご冥福を祈り黙祷が捧げられた。続いて、病气療養中の今井学長に代わり中村副学長よりご遺族に対し御礼が述べられた後、23体のご遺骨をご遺族お一人お一人に丁寧に返還された。最後に、解剖学講座の諏訪教授から「献体にご協力を賜ったご遺族に対し、心より御礼を申し上げたい」との謝辞が述べられ、式は滞りなく終了した。



解剖体遺骨返還式でご遺族に挨拶する中村副学長

学位（博士）授与報告

高島隆太郎 甲第569号 (平成19年3月20日)
Effect of topical fluoride applications on remineralization of tooth enamel *in situ* assessed by QLF methods and SEM (QLF 法および SEM により測定した *in situ* 環境下でのエナメル質再石灰化に対する局所的フッ化物応用の影響)

竹安正治 甲第570号 (平成19年3月20日)
Differentiation of dental pulp stem cells into a neural lineage (歯髄幹細胞の神経系細胞系譜への分化能の解析)

橋本和哉 甲第571号 (平成19年3月20日)
再構築 CT 画像による上顎臼歯部へのスクリー型 TAD(Temporary Anchorage Device)植立部位の評価

勝見友晴 甲第572号 (平成19年3月20日)
不均質な三次元有限要素法モデルを用いた歯の移動時の応力解析

林 和男 甲第573号 (平成19年3月20日)
下顎骨の偏位を伴う顎変形症患者の左右側乳様突起の対称性について

田口千洋 甲第574号 (平成19年3月20日)
Antisense *Ets-1* transfection restrains oral cancer invasion by reducing matrix metalloproteinase activities (Antisense *Ets-1* は matrix metalloproteinase 活性を減少させることにより口腔癌浸潤能を抑制する)

金村直子 甲第575号 (平成19年3月20日)
Morphological study of gingival connective tissue papillae in type II diabetes model rats (II型糖尿病モデルラット歯肉結合組織乳頭における形態学的観察)

堂前英資 甲第576号 (平成19年3月20日)
骨芽細胞の wound healing における非受容体型ロシキナーゼの関与

室井悠里 甲第577号 (平成19年3月20日)
Long-term effects of cyclic comprehensive loading on three-dimensionally cultured human synovium-derived cells (メカニカルストレスに対するヒト滑膜由来幹細胞を用いた三次元培養組織の長期的応答)

赤根光宣 甲第578号 (平成19年3月20日)
口腔扁平上皮癌細胞の浸潤能に及ぼす RNAi を用いた *ets-1* - *ets-1* 遺伝子の機能評価

鶴見暁子 甲第579号 (平成19年3月20日)
ベンチプレス動作時における顎口腔機能の様相

小石同亮 甲第580号 (平成19年3月20日)
新製法によるオールセラミッククラウン第2報

小林将之 甲第581号 (平成19年3月20日)
噛みしめ強度の違いが遠隔筋促通効果に及ぼす影響 - 経頭蓋磁気刺激法による分析 -

高橋貫之 甲第582号 (平成19年3月20日)
ラット歯周組織欠損の早期創傷治癒過程における III 型 コラーゲン 形成に及ぼす Enamel Matrix Derivative (EMD) の影響

寛 晋平 甲第583号 (平成19年3月20日)
Effect of titanium surface roughness on the cytocompatibility of osteoblast-like cells (骨芽細胞様細胞に対するチタンの表面粗さの影響)

岩山和史 甲第584号 (平成19年3月20日)
咬合干渉付与時の自立神経機能について

楠 良子 甲第585号 (平成19年3月20日)
Bone response after tooth extraction in ovariectomized rats (卵巣摘出ラットによる抜歯窩後の骨反応)

山田龍男 甲第586号 (平成19年3月20日)
ラット顎下腺半側切除後の促進性回復

田治米康宏 甲第587号 (平成19年3月20日)
表面性状の異なる歯科インプラント周囲の歯槽骨に及ぼす PRP (多血小板血漿) の影響

本橋具和 甲第588号 (平成19年3月20日)
圧迫骨短縮術の三次元有限要素法による力学解析

鈴木康一郎 甲第589号 (平成19年3月20日)
髓室側象牙質に対するコンポジットレジンの接着

平尾彰規 乙第1486号 (平成19年3月28日)
唾液 α - アミラーゼの定量による小児患者の歯科治療におけるストレスの評価

大崎善弘 乙第1487号 (平成19年3月28日)
スクリー型 TAD (Temporary Anchorage Device) のトルク荷重時の応力解析

木下三樹夫 乙第1488号 (平成19年3月28日)
成長期の小児における最大口唇閉鎖圧について

李 宣杰 乙第1489号 (平成19年3月28日)

Relationship between dento-facial vertical proportions and overbite in Taiwanese (台湾人における前歯部オーバーバイトに関する因子の検討)

春次賢太朗 乙第1490号 (平成19年3月28日)

The role of anti immune response on adenosine simulated macrophage (アデノシン刺激によるマクロファージにおける免疫応答抑制について)

多田久也 乙第1491号 (平成19年3月28日)

Effect of internal flexible mechanisms on occlusal contacts of implant-supported prostheses (緩衝機構の違いが骨内インプラント補綴装置の咬頭嵌合位における咬合接触状態に及ぼす影響)

周 蒼 乙第1492号 (平成19年3月28日)

Use of ultrasonic imaging for analysis of the craniofacial skeletal morphology (顔面頭蓋骨格の形態分析による超音波画像の応用)

川本先生はじめ3名が定年退職

平成19年3月31日付けで3名の教員が定年退職された。退職されたのは、歯科矯正学講座教授川本達雄先生、数学教室助教授小林義彦先生、歯科衛生士専門学校校長矢尾和彦先生の3名です。また、みなし定年により塩路伊佐子先生はじめ教員14名、職員は西尾和夫病院事務長はじめ16名、あわせて30名が退職した。

川本達雄先生および矢尾和彦先生から退職の挨拶を寄稿していただきましたので掲載します。

定年退職に際して 歯科矯正学講座教授 川本 達雄

昭和39年(1964年)に同級生10名とともに歯科矯正学教室に入局し、42年が経過しました。その間、大学院生として4年間、助手として5年間、助教授として23年間、そして教授として10年間勤めさせていただきました。



大学院生および助手時代には中村正雄教授、助教授時代には木下善之介教授のもとで仕事をさせていただきましたが、思い返せばこの両時代は、時間がゆったりと流れていたように感じます。

助手、助教授時代は、当時の教授のお陰でかなり好きなことに時間を割けたと思います。また、時代も現在のようにめまぐるしく変化しないで、ゆったりとしたもので、診療のための時間、学生教育に使う時間は今と比べて極端に少なく、その分研究にかなりの時間を割きました。さらに、助教授になって2年目に南カリフォルニア大学とワシントン大学へ留学という勝手を許していただきました。いまから思えばなんといい時代であったのかと感じます。

このところの10年、すなわち教授に就任してからは、楠葉学舎、天満橋附属病院の設備環境は良くなったのですが、どうも世の中の歯車がうまく噛み合わなくなってきたような気がします。診療では、患者さんが好きなことを言うようになり、当方にも原因があるのでしょうか、以前にはなかった苦情処理の件数が増えてきました。学生は、多様化したといえれば格好がいいのですが、三分の一の学生は以前では考えられなかったような学生であります。これも、当方の責任もあるのでしょうか、中学・高校時代の教育に何かが抜けているのではないかと感じる次第です。

歯学教育の施策面では、これも最近になっていろいろと大きな変化が起こっています。病院実習時の学生にある種の資格を与えるべく、4学年から5学年にかけてCBT、OSCEといった第二の国家試験ができたり、歯科医師数を減らすために国家試験の合格ラインが上げられたり、さらには卒業直後に臨床研修が義務付けられたりと、ここ数年の間に教育システムがめまぐるしく変わっています。このような変化に合わせて、われわれの教育システムも変えなければならず、てんやわんやという状態が続いています。このように性急な変革は、教育の場にはそぐわないような気がします。やはり、自動制御のサーボシステムのようにわずかなずれを少しずつコントロールしていくのがよいのではないかと感じます。

最後になりましたが、このように無事定年退職を迎えることを可能にいただいたすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

定年退職に寄せて
歯科衛生士専門学校校長 矢尾 和彦

この歳になると、高校までの友人たちは、ほとんどが退職したり閑職に退いたりしており、これまでに「〇〇君の定年退職に寄せて」を何度書いたことだろうか。



いよいよ自分の順番が回ってきたわけだが、学生として6年間、奉職して42年間、67年という人生の大部分を母校の庇護の下に過ごしてきたことになる。職を辞するにあたり“遙けくも来つものかな”という感慨もあるが、一炊の夢の間であったようにも思える。悔いる点も多少はあったが、自分では最高に幸せな人生を歩ませて頂いたと思っており、もう一度人生がやり直せるものであれば、やはり大阪歯科大学で過ごしたいと思う。

振り返ってみると諸処に転機があった。第一の転機は、父に“歯科の神髄は補綴にあり”と云われ、河邊清治先生の下で学ぶべく、下宿先まで決まっていたのを断り、留学の一言に釣られて小児歯科学講座に籍を置いたことであった。留学したフォーサイスではブルードボルド教授の下でフッ素の研究に携わっていたが、あるとき歯科保存学のドーガン教授に誘われて、まだ黎明期にあったコンポジットレジンの臨床研究に参加したのが第二の転機であった。後年、クラレ社の協力を得て、今ではフロアブルレジンと呼ばれている低粘稠度レジンを開発できたのは、その時に学んだ経験のおかげである。第三の転機は、帰国後、提出した論文が卒後4年では時期尚早との理由で受理されなかったことであった。提出時期を待つ間、元阪大解剖学教授の高木耕三先生に師事して組織発生学を教わった。少々遠回りではあったが、結局、高木研究室でまとめた研究結果が学位論文になったし、このときに学んだことが後年の研究に大いに役立った。

第四の転機は、終の棲家として12年間を過ごした専門学校時代であった。西も東も分からぬままに飛び込んだ歯科衛生士教育の世界では、教育改革と修業年限延長という奔流の中で、泳いでいたのか溺れもがいていたのか自分でも判然としない内に時が過ぎた。それでも定年という彼岸にたどり着いてみると、専攻科が

軌道に乗り、三年制養成が始まり、牧野には立派な設備のある校舎が出来上がっていた。これは偏に法人、大学の全面的バックアップの賜であることは言うまでもないが、本校の教職員が夢の実現のために献身的に努力した成果であることも確かである。

大学時代の友人の多くは、まだ現役生活を維持しているようだが、ボストン時代の仲間は、全員が悠々自適の隠退生活を楽しんでおり、時折交わすメールには、いつも“働き病に冒された哀れな男に神のご加護を、アーメン”と書かれている。あと一月たらずで第五の転機を迎えることになる。周囲からは休むと惚けると云われ、自分でも何かをしなくてはと思っているが、とにかく今は、一休みしたい気持ちである。

おわりに、私ごとき者に42年の永きに亘って御指導、御鞭撻、御支援くださいました大学、専門学校の教職員の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、父、私、妻、長男、長女と三代に亘ってお世話になった我が母校、大阪歯科大学の益々の御発展を祈念いたします。

平成 18 年度 臨床研修費等補助金交付

本学から平成19年1月10日付けで申請していた「平成18年度臨床研修費等補助金（歯科医師）」について、大阪府より3月22日付けで交付決定の通知があり、事業に要する経費 169,388,000 円が補助金として、3月28日交付された。

寄 贈

下記の寄贈を受けましたので報告します。寄贈いただいた各位には心より感謝いたします。

- ・大阪歯科大学第55回卒業生(一同)
卒業を記念して 平成19年3月20日寄贈
講堂に学歌入りブロンズプレート 1,260,000円也
- ・川本 達雄名誉教授
定年退職を記念して 平成19年4月1日寄贈
学術研究奨励基金として 1,000,000円也

古跡養之眞前学長, 名誉学長に

去る平成18年10月26日に開催された理事会において、古跡養之眞前学長が名誉学長に推挙され、承認された。



古跡養之眞先生は歯科放射線学講座の教授を長く務められ、附属病院長を歴任し、平成12年に学長に選出された。また、クラシック音楽に造詣が深く、平成15年4月には、本学講堂においてウィーンフィルハーモニー管弦楽団の若きコンサートマスターのフォルクハルト・シュトイデ氏を招き、演奏会を開催した。



演奏会の様子

平成18年度 第2回人権講演会

人権啓発推進委員会では、今年度第2回目の人権講演会を平成19年2月26日に天満橋学舎西館5階臨床講義室で開催しました。今回は「ちがいを豊かさに～ともに生きる社会をつくるために～」のテーマで、甲南女子大学講師の岩山 仁先生をお招きして講演をしていただきました。附属病院の教職員をはじめ多くの方が熱心に受講されました。

日本に住む外国人は、異なる文化のなかでどう暮らし、何を感じるかを体験的に研修していただきました。コミュニケーションスキルの一つとしての「あいさつ」

も、会釈→握手→ハグ→頬ずりと国によって異なります。周りの参加者とハグをやってみて「ちがいを」を体感された方も多くいました。

「ちがいを」で社会から排除される実感を体験するゲームもありました。背中に張られたシールを人に教えてもらいながらグループに固まっていきます。でも、入れてもらえない人が出てきます。なぜでしょうか？興味のある方は、次回楠葉学舎でも同じ講演をしてもらいますのでどうぞご参加ください。

誰にも無意識に出てくる「心の壁」をどう越えたら良いのか。多様性の尊重が豊かな「共生社会」をつくり、その人がもともと持っている力を出せる環境を皆でつくろうと結ばれました。昨年、本学で講演された東ちづるさんが強調された「対等」という言葉が思い起こされました。先入観を留保して「ちがいを」を認め、「対等」の意識が、共生への第一歩と感じました。



講演中の岩山 仁先生



参加者もゲームに参加

人 事

昇 任

生理学講座	助教授	内橋 賢二
口腔治療学講座	講師	吉田 匡宏
	以上	H. 19. 1. 1付

教員採用

口腔治療学講座	助手	辻 則正
		H. 19. 1. 1付
薬理学講座	助手	増田 吉彦
		H. 19. 2. 1付
生物学教室	講師	檜枝 洋記
		H. 19. 3. 1付

定年退職者

歯科矯正学講座	教授	川本 達雄
数学教室	助教授	小林 義彦
歯科衛生士専門学校	校長	矢尾 和彦
	以上	H. 19. 3. 31付

みなし定年退職者

生化学講座	助教授	塩路伊佐子
口腔衛生学講座	助教授	上村 参生
歯周病学講座	講師	西村 和晃
歯周病学講座	講師	稲田 芳樹
生理学講座	助手	高井 規安
生理学講座	助手	稲田 條治
歯科保存学講座	助手	江頭 勝
歯周病学講座	助手	護邦 忠弘
歯周病学講座	助手	高田 耕平
口腔外科学第一講座	助手	村田 雄一
歯科矯正学講座	助手	川嶋 信子
歯科矯正学講座	助手	橋本 登
総合診療部診療科	病院教授	矢追 雅浩
臨床研修教育科	病院講師	中矢 健二
歯科技工士専門学校	教員	木本 吉昭
歯科技工士専門学校	教員	篠崎 照泰
病院事務部	事務長	西尾 和夫
大学院課	課長	堀之内尚樹
総務課総務担当	主任	和田 智恵
総務課人事担当	主任	青山 敏子
大学院課	主任	井上加代子

教務学生課	事務職員	川端 路子
図書課	事務職員	大笹 恵子
医事課	事務職員	上平 愛子
附属病院	薬剤師	石床 純子
附属病院	歯科技工士	森川 幸子
附属病院	歯科衛生士	嶋岡美枝子
総務課総務担当	労務職長	神戸 逸郎
病院庶務課	守衛	岡田 昇
病院庶務課	守衛	矢田 孝
	以上	H. 19. 3. 31付

依願退職者

歯科保存学講座	助教授	井上 昌孝
歯科保存学講座	講師	川本 雅行
口腔外科学第一講座	講師	篠田 豊
高齢者歯科学講座	助手	高橋 一也
小児歯科学講座	助手	平尾 彰規
歯科技工士専門学校	教員	西田 彰宏
附属病院	看護師主任	大東 文子
附属病院	看護師	寺園美智代
附属病院	看護師	深見 知代
	以上	H. 19. 3. 31付

職制変更による解職

病院庶務課卒後研修担当	課長	神 光一郎
		H. 19. 3. 31付

あ と が き

— 余 談 —

残念ながら、今井理事長・学長は病氣療養中のため卒業式には出席されなかったが、両副学長に卒業生および大学院修了者へ贈る言葉を託されました。

学長としての挨拶の中で、「無知を恐れることなかれ、偽りの知識を恐れよ」という言葉が贈られました。自らの無知を自覚することが、学ぶ姿勢となり成長へと導くという意味ですが、この言葉が17世紀フランスの数学者パスカルの言葉であることを初めて知りました。パスカルは、多才な人で物理学者でもあり、また宗教家の一面もあり、「人間は考える葦である」という有名な言葉を残しているように人間観察にも優れ、モンテ

一ニュに始まるフランス独特の文学の一形式「箴言」を継承し、「モラリスト」と呼ばれる系譜に属しています。

同時代には、少し毒を含んだ箴言を多く残した巨匠ラ・ロシュフーコーがいます。「自分の内に安らぎを見出せない時は、それを外に求めても無駄である」、
「凡人は、概して、自分の能力を超えることをすべて断罪する」、「われわれは皆、他人の不幸には耐えられる強さをもっている」など、短い言葉で皮肉たっぷりに人間の核心を洞察しています。そのラ・ロシュフーコーも、パスカルと同じように「ありのままの自分を見せる方が、ありもしない自分を見せかけようとするよりも、本当は得になるはずなのだ」というストレートな箴言も残しています。

一方、東洋にもはるか古くから、「知らざるを知らずとせよ。これ知るなり」（論語）があります。学ぶ姿勢には近道はありません。ありのままの姿をそのまま認め、そこからスタートするしかありません。無知を恐れず学ぶ姿勢を失わなければ、やがて自信となり、「自信を持って生きている人は、自分と他人を比べず、自分の置かれている立場に感謝している。我々自身が抱えている自信が他人に対する信用を芽生えさせる」（ラ・ロシュフーコー）結果となります。

また、理事長として贈られた「もし成功しなかったら試みよ、さらに試みよ」は、あまり知られていませんが、19世紀のイギリスの評論家ウィリアム・ヒクトンという人の言葉だそうです。いかにも、イギリス人らしい経験を重視する実直な言葉ですね。この二つの言葉、「無知を恐れることなかれ、偽りの知識を恐れよ」も、「もし成功しなかったら試みよ、さらに試みよ」も、卒業生および大学院修了者だけでなく私たち自身にも必要な言葉かもしれません。

今井先生が心置きなくゆっくり療養され、快復・復帰される日が待たれます。

大阪歯科大学広報 第146号

発行日 平成19年3月31日

編集発行 広報委員会

〒573-1121 枚方市楠葉花園町8-1

電話 072-864-3111